

## 碑文の製作／再解釈／偽造からみた一二世紀から二二世紀の中国華北社会

飯山 知保

ただいまご紹介にあずかりました飯山と申します。私に今日与えられたテーマは碑文についてお話をしろということで、山西省という地域の一つの事例に基づいて、碑文の製作・再解釈・偽造の意義についてお話をしたいと思えます。

まず、ご存じの方が多くと思いますが、厳密に言いますと碑文というのは石そのものではなくて、石に彫られている文章のことです。では碑文が刻まれた石そのものは何としかいえないかと、「碑」あるいは最近では中国語の表現をそのまま使って「碑刻」と呼ぶことが多いかと思えます。この講演のタイトルのつけ方がよくなかったのですが、今日お話をするのは、碑文の解説というよりも、モノとしての

碑刻そのものがそこに存在することをどのように解釈すべきか、ということです。

これはどの史料についても言えることですが、碑文あるいは碑刻というのは、設立された当初のままの文脈で、そのご読まれ／解釈され続けることはあまりありません。碑刻というものは見てお分かりのとおり石なので、半永久的に残ることを期待されます。そしてそれは時として、設立者の意図をこえて、碑刻というモノが解釈される可能性を生みます。日本でも江戸時代後期以降、碑が結構作られたので、皆さんのお住まいのそばにも多分幾つかあると思いますが、もしお時間があったら内容を読んでみて、なぜここにあるのか、なぜここに今置かれているのかということ

をお考えになってください。

文献史料の場合は、抄写・印刷される過程で、その内容が変更される可能性が常にあります。その時その時の需要に応じて字を足したり引いたり、内容をかなり変えることが行われてアップデートされるのですが、碑文にはそれが基本的にはありません。このため、碑刻は紙に比べて永遠性があると考えられることがあります。なぜなら内容を書きかえることができないので、紙よりも信頼に足る史料であるというのが、恐らく世の東西を問わず共有されていて、それがゆえに碑刻は製作者の意図を超えた形で利用されることがあります。

具体的なお話に移っていきますと、今回考察の対象とするのは北中国です。南と北がどこかというのはいろいろ問題がありますが、華北とも呼ばれる地域です。便宜的にモンゴルと東北地方は外してお話をしたいのですが、そこで一二〜四世紀に非常に流行した先塋碑という碑刻のジャンルがあります。先塋というのは祖先のお墓という意味です。まず今日のお話の順序としてはこれがなぜ勃興したのかというお話をモンゴル帝国の統治と絡めてお話をします。そして、先塋碑という碑刻のジャンルが、モンゴル帝国の中国放棄の後にも偽造されるのですが、なぜ偽造されたのかということ、ひとつの事例を中心にお話しします。そして、それが今に至るまでどうやって用いられているか

ということを通じて、一二〜二一世紀の華北社会の変遷とということを見てみます。

山西省北部にある、懸空寺というお寺をご存じですか。崖にへばりつくように建てられている世界遺産のお寺なのですが、その同じ県の、観光客がまず行かない北部に西留村という村があります。この村の西側の台地に僕が知っている限り一番保存状態のいいモンゴル帝国時代の家族墓があります。いまでも二基の碑が現存しているはずですが、僕が最後に行ったのは五〜六年前なので、もう盗まれていて、ないかもしれません。そこに、一二九九年に立てられた、「大元正議大夫浙西道宣慰使兼行工部尚書渾源孫公先塋碑銘」という碑刻があります。見た目は、おそらくはよく見たことがある中国の碑だと思えますが、内容はかなり違います。何かといいますと、普通こういう形式の碑刻は例えば神道碑とよばれ、お墓の参道の起点に立てられます。神道碑の内容はそこに葬られている故人の実績を記録するもので、要はほぼ一人の人物の実績しか書いていないことが多いです。その一方、先塋碑では特定の故人に焦点が当てられず、家族の歴史の叙述に焦点が当てられます。これは違う碑ですが、右側が家族の歴史がずっと書いてあって、左側をご覧ください。家系図が書いてあります。この時代に南中国では族譜と呼ばれるような今でもある冊子状の一族の歴史の史料が普及し始めるのですが、北中国

にはほぼないんですね。中国の歴史を通じてのことですが、特に北中国の人は石が好きです。重要な情報は石に彫ることが多いのですが、南中国の人は紙のほうを選ぶ傾向があるように思います。理由はよくわからないのですが、先塋碑もほぼ北中国にしかありません。

簡単な年表を書くとき、まず北中国では一二七年に北宋という国が減びまして、北からやってきた女真人の金という国になります。そして、一二三四年に女真人はモンゴルに滅ぼされます。二世紀の間に二回北から攻めてくる人たちに王朝が減びされることが起きますのですが、モンゴルの征服以前に、先塋碑を建てたのはほぼ平民たちでした。科挙に受かつて官位を持っているような人たちは、先塋碑を立てませんでした。同時代のある碑刻によれば、先塋碑は「礼に合致しないのでは」という不安が書かれています。つまりは、庶民が墓石に自分の系図を刻む習慣が先塋碑という碑刻ジャンルの出発点だったのですが、モンゴルの征服以降は、ほぼ九〇パーセント以上が官位所有者が立てるようになってきます。数も激増します。これをどういうふうに解釈をするのかということですね。

これは碑文を一つ一つ読むと何となく分かるのですが、モンゴルの支配下で官位を得た人たちの祖先は、ほとんどが平民だったんです。つまり科挙を受けるような人々たちではなかったのですが、モンゴルが攻めてきて二〇年間戦争

が起こると、その時に機会をつかんでモンゴルの軍隊に参加し、新しく官位をもぎとった人たちが次の時代のエリート層になってくるわけですね。なので、恐らくこの碑の勃興はモンゴルの侵攻によって、それまで俗だと思われていた習慣が新しいエリート層の勃興によって正統的な文化に変わっていくことだと思えます。

さて、モンゴルの統治の原則として、譜代関係の重視があります。つまり、何世代にわたってモンゴルに仕えているのかがその人の政治的な地位を決める習慣があったんですね。なので、チンギスカンの時代から仕えている人は、その後の時代から仕え始めた人よりは政治的な地位が高いということになりました。モンゴル時代は、科挙の重要性がその他の時代にくらべて低かったといわれますが、その理由の一つには、譜代の臣従関係によって官僚を補充していたので、科挙はそんなに必要なかったことがあります。そして、父から息子への譜代関係を証明する際には、系図を提示する必要があります。先塋碑は、拓本をとればすぐに系図になるので、便利な系図の保存媒体だったと思います。しかも碑文ですから、紙よりも耐久性に優れた保存媒体ということになります。

このように、その勃興がモンゴル帝国の統治原則と密接な関係があったため、当然予想されることですが、モンゴル帝国が減びると、先塋碑の数は減少します。しかし、碑

に系譜を刻み続けることは、その後の時代にも残っていきます。科挙に受かるような高位高官はもう先塋碑を立てることは少なくなるのですが、村の偉い人や県レベルの有力者は明以降も先塋碑を立て続けていきます。

ようやく本題に入りますが、山西省北部の代県というところに、楊家祠堂という場所があります。山西省は日本からそう行きやすいところでもないですし、ここに旅行で行く人は少ないと思いますが、代県では主要な観光地です。祠堂というのは一族の位牌を置く場所です。その一族に属している人の先祖の位牌を置くことによつて、そこに位牌がある人の子孫が同じ一族のメンバーだと確認する場所です。見た感じ、もし皆さんが広東省やそのほかの南方中国の諸地方に行かれて祠堂をごらんになることがこれからあるとすれば、規模は決して大きくないことがお分かりになると思います。しかし、これは北中国ではかなり立派な祠堂です。そもそも北中国には祠堂というものはあまりありません。このため、最初の疑問はなぜこの家系は祠堂を建てて、宗族と呼ばれるような大規模な親族集団を形成したのか。なぜほかの家系はできなかったのか、しなかったのかということですね。

そして、この事例がさらに面白いのは、楊家将が祖先という、この人たちの祖先伝承です。『楊家将演義』という、『三国志』『水滸伝』のような小説があります。楊氏という

北宋時代に実在した武将の一族が、契丹という北方の人々と世代を超えて戦い続ける話です。

私が楊家祠堂に初めて行ったのは八年くらい前です。前置きが長くなりましたが、今日皆さんにお見せするのはこの祠堂に展示される碑刻です。便宜的に四つまで番号をふりますが、この中の②という碑が一三二九年の日付を持っていて、自分たちは楊家将の子孫だと書いてあります。なので、この場所は今でも一三世紀につくられた楊家将の子孫の祠堂だと公式に認定されているわけです。僕が知らなかったのは①番という一番小さい碑があったことです。①から③までの三つの碑の拓本を持つてきたので、皆さんに見ていただきたいと思います。多分、①と②は一目で碑文のスタイルが違うことが分かると思いますが、ほかにスタイル以外に何が違うかというのをご覧になっていただきたいと思います。

まず①の特徴として、②とくらべて碑文の風化がかなり進んでいます。日付は一三二四年になっています。他方、その五年後に作成されたはずの②は、八百年経つても碑文が非常にはっきりしています。①の碑は、砂岩と呼ばれる一番安い、雨に打たれると風化が激しい石材で作られています。②番は花崗岩ですが、この地域では採れないんですね。なので、これはかなり遠いところから持って来たので高かったはず。材質だけでいうと五年のうちこの人

たちが突然お金持ちになったってという感じがします。あとは内容です。①には楊家将が一切出てきません。しかし、②では最初の行から、我々の一族は宋の楊家将の子孫だというのから書き出しが始まっています。五年のうちにこの一族に何があったのかでしょうか。内容的には、①番の碑は太婦人と呼ばれる人が今際の際に二人の息子に「別居するな、一族は絶対に一緒に住まなくてはいけない」ということを言つて、もし将来的に財産を分配するような者があらわれたら、この碑刻を裁判の証拠に使えということが書いてあります。その一方、②は楊氏の一族が楊無敵、すなわち楊業という楊家将の始祖の子孫であることが書いてあります。その系譜を記した後に、各地のお墓の場所が列挙されます。この碑文の半分から左側はどこそこにとれくらの広さの墓地があるということがずつと書いてあるだけです。その後、四川、貴州というところにも一族がいることが書かれています。

②が偽造である雰囲気は濃厚なのですが、当然何がその背景にあるのかということ、ほかの文献史料を使って確かめないといけません。碑文は、文献史料などその他の状況証拠と合わせて分析して初めて、その価値が十分にわかるということがよくあります。また、重そうに見えてもこのくらいの大きさの碑刻なら三人くらいで、梃子の原理を使えば動かせるので、誰かが何らかの主張のために碑刻を

動かすということもよくあります。

さて、文献史料と比較すると、②番のこの碑刻の系譜はおかしいです。楊業という人は一〇世紀に実在した人ですが、お父さんの名前は当時の史料だと「信」という字なのですが、この碑文だと「滾」になっています。松浦智子さんという研究者によれば、その息子たちの名前も、ほとんど一六世紀の小説に基づいた名前だと考えられます。つまり、通俗小説で出現するフィクションのキャラクターがこの碑には実在の人物として出てきます。

ではなぜ、一六世紀に、通俗小説の内容に基づいて②を偽造する必要があったのでしょうか。恐らくはヒントになるのは、ここにずつと書いてある墓地の場所です。これを最初に注目されたのは僕ではなくて山東大学の韓朝建先生なのですが、明の時代には里甲制という制度があつて、建前上は自分の属している里の外に土地を持つてはいけませんでした。ただ例外的に、それが前の王朝の時代からある祖先代々の墓地であれば合法的に所有できたのです。それをふまえて、②に列挙される墓地の総面積を見てみると、当時の代粟の耕作可能な土地の一・六パーセントにも相当します。そのいずれもが、当時楊氏が居住していた里の外にあります。

一六世紀にもなると、里甲制が弛緩してきて、自分の里の外に土地を持つことが普通になってきました。そこで、

明は違法の土地所有の摘発と課税を行い始めます。おそろく②が偽造されたのは、ちょうどその年代にあたっていきます。実は、②の右側に建っている③番目の碑が一五五〇年の日付を持っているのですが、字体も石の質も全く②と一緒にです。このため、一番可能性のある②碑の偽造の年代は、多分二六世紀の半ばであると思われる。ちょうど改革が行われていて、このままだと自分の里の外に持っている土地が徴税対象になってしまうというタイミングであった可能性があります。結果的に、この一族は土地の継続所有に成功し、それは明の滅亡後もずっと続きました。その間、祠堂は拡張を繰り返されて今に至ります。

当然疑問に思うのは、なぜ①②③を並べて展示しているのか、ということ。①番があることによって、見る人が見れば②は偽造だとわかってしまう可能性があるからです。これは、一九九〇年代の初めに、台湾の世界楊氏協会の楊さんという人がここに来て、お金を出して祠堂を修復した際に、これら碑刻をまとめて展示することにしたからです。もともとは当然、一緒に立立てられていなかったんですね。

この事例がとてもおもしろいのは、偽造が良い悪いという評価とは関係ありません。なぜ偽造が必要だったのか、偽造をしたことよって僕らはその時代の人たちがどういう問題に直面したのかが分かるからです。モンゴル帝国時

代、モンゴルに臣従してうまくいった人たちが、明の時代には没落します。その後、モンゴル時代の楊氏と直接の血縁関係があるかどうか分からないですが、楊姓の人々が何とか経済力をつけて、いろいろな土地を買ったあとに、新しい税制改革が起きて困難に直面した際に、もともとあった碑刻を利用してそれを乗り越えようとしたというわけできます。②を作成した人々は、かなり効果的に①を利用したということです。

こうした事例は少なからずあります。少し話がそれてしまいますが、僕らが知っている中国の歴史は南中国の歴史が圧倒的に多いです。なぜかというと北中国は文献史料がすごく少ないからです。一〇世紀以降、南中国の社会がどうなったかというのは結構分かっています、王朝交替をこえた様々な連続性があったことがわかっています。

その一方、この碑が示しているのは、まず金から元の交替期に、北中国では官僚を出すような家系の大幅な変化があったことです。右側の碑に書かれているこの人たちは金の時代の祖先がどうだったかは一切書いておらず、官僚の家系であったとは思えません。モンゴルが来たことよって、こうした人たちが、前の社会的な支配層が没落した後、新しく支配層になるんです。ただ、この人たちもモンゴルが去ったことよって没落します。その後、勃興したの

は新しい支配に順応した人たちでした。清代の北中国の文献史料、とくに家譜は、一番古くても明くらいまでしかその祖先を遡らないことが多いですが、これは多分当たり前なんですね。南の常識で北を見るとなぜ明以前のことを書いていないのかと思うかもしれませんが、繰り返し断絶があったのです。ただ、碑は残っているのです、新しい支配者層になった人たちも何かをする時は前の時代の碑を利用することもあり、それにより断絶の実像が明らかになることもあるということです。

今日お話ししたことをまとめると、碑刻は他の文献と何が違うかという点、言ってみれば永続性です。ずっと続いていくんだ、残るんだということ前提にして作られるから、読む側もそれを前提にして読むし、偽造する側はそれを前提として偽造します。当然、書籍を偽造して系譜を捏造することもできたのですが、恐らくは碑刻のほうが説得力があったと推察されます。特に今日取り上げた事例では、①という土台にする素材があったので、それを使ったという点だと思います。

一三二四年の碑刻が立てられた目的は、モンゴルに仕える官員たちの系譜を保存することと、訴訟の時に誰が家族の正規の一員なのかを残すということでしたが、モンゴル時代が終わった後では、そんな目的で使われたわけではないということです。作った人には申しわけないですが、そ

の本来の用途はとつきの昔に忘れられていて、ただ碑刻に永続性があるので他の用途に使われているということだと思います。この大学のキャンパスの中にも碑刻が多分どこかにあると思います。誰が作ったのか分からないですが、そうした碑刻が設立者たちの思惑どおりに使われているかという点、多分そういうことは稀だと思います。今の学校の人たちが思ったとおりに碑文は置かれていて、受容されていると思います。ただ、これが二十年、三十年経って、その碑が持つ価値が変わってきた場合は、校門の入り口に移される可能性もあるわけです。なので、最後ですが、特に碑を理解する時は碑文だけ読むのはよろしくないと思います。碑文だけ読んでも、碑刻がそこにあることの意味の半分くらいしか分からないと思います。

早いです、これで終わって大丈夫ですか。どうもありがとうございます。

(了)